

*バティ・ラングリー『ガーデニングの新原則』1728年 Batty Langley, *New Principles of Gardening*

†『現代のガーデニングに関する随想』ホーラス・ウォルポール著 1785年 *Essay on Modern Gardening*

ここにケントが追い求めた理想が示されている。自然を模倣すること、それが新しい主義の目標であった：－「自然は直線を嫌う」、これがケントの基本的な原則の一つであり、したがって、並木道と真っすぐな園路と生垣は目障りであり、この嫌悪の感情は他の風景式造園家によっても共有された。バティ・ラングリーBatty Langley [1696～1751年] は「モスクワからペテルブルグ方面へと通じる有名なビスタ *vista* や、あるいはインドのアグラからラホール方面へのビスタなどに沿って進むのを強いられることは、ガレー船を漕ぐのを強いられると同じくらい嫌なことであったに違いない。それは D_卿の高く刈り込まれたイチイの生垣の間を、閉じ込められたまま、たったの数分でも歩く時に感じる気持ちのようなものではないかと私は想像した」と書いた。これは新しい主義の造園家たちが、彼らの先人たちのやった仕事に対する軽蔑の気持ちを表現するための誇張された言葉遣いの見本の一例に過ぎない。

自然を模倣しようとするこの情熱は、当時広まりつつあった一般的な反応の一部であり、これはガーデニングの世界だけではなく、文学やファッションの世界でも見られた。極端に人工的なフランス趣味は長い間、ヨーロッパ文明の進展をリードしてきたが、今やその誇張された様式主義の足枷を振りほどこうとする動きが生まれた。当時の詩人たちもこの自然主義の先駆者であった。ダイアーDyer [1699～1757年] はその詩「グロンガーヒル」“Grongar Hill”において、またトムソンは『季節』*Seasons*において、当時の造園家や建築家とその景観計画の中で真似しようと追い求めていた情景というものを呼び覚ましてくれた。その考え方は、詩人が称賛し、クロード Claude [クロード・ロラン 1600頃～82年] がキャンバスの上で永遠の生命を与えた景観というものを創り出すことであった。しかしながら、自然美の愛好者たちは間もなく規則や理論により絶望的なまでに型にはめられてしまい、それはかつて整形形式を重視する流派のデザイナーたちと同様な状態になってしまった。彼らが設計した庭園は見る人に型にはまった印象を与えるように計画された：－詩人のシェンストン Shenstone [1714～63年] は「庭園の情景は崇高さ、美しさ、哀愁やもの悲しさに多分分割されているのであろう」と書き*、さらに続けて「技術は自然の領域ではその足場を見つけることを決して許されない」とする。にもかかわらず、これらの造園家たちはあらゆる人為を駆使して見る人に押し付け、またその景観というものを真実の姿とはかけ離れたものへと作り変えているのである。

*『ガーデニングに関する随感』ウィリアム・シェンストン *Unconnected Thoughts on Gardening*

シェンストン自身も並木道が実際の距離よりも長く見せられるかもしれない方法について提案している。「並木道の手前側を広くしてそこにイチイの木を植える、そしてモミの木、そして段々と消えていくような木を、最後のセイヨウタチヤナギ *almond willow* [*Salix*

triandra] かコリヤナギ類 *silver osier* のところまで植える；そうすると大変驚くほどの目の錯覚が生まれる」。リザーズ *Leasowes* にある彼自身の庭園はこの「ガーデニングの技術」を実行するすべての人々によりこの様式の完全な手本と考えられた。そこには湖があり、小川があり、カスケードがあり、そのことをジョージ・メイソン *George Mason* [1735~1806年] は「生きている噴水」と記したが、これらのものは「完璧さの極へと達した」と言っている。これらの小川の一つを見下ろす腰掛には、小川を称える詩が刻み込まれていて、それは次のように終わる：－

(仮訳)

“Flow, garden stream, nor let the vain	流れよ、庭園の小川よ、虚栄をして
Thy small unsullied stores disdain:－	汝の小さきけがれなき宝を辱めさせるな：－
Nor let the pensive sage repine	物思いに沈む賢人をして悲しませるな
Whose latent course resembles thine.”	その隠れた道筋は汝がものとそっくりだ

庭園全体を通じて、峡谷の中、あるいは曲がりくねった園路の脇には、腰掛、洞窟、廃墟や飾り壺が予期せぬ場所に現れ、そこにはどこかの友人に宛てた言葉が刻まれていたり、何かしら自然の美しさを称えた歌が歌われていた。

新機軸の中で最も突出していたのが装飾的に広がる水面の扱いの変更に関するものであった。「石の水盤」、大理石の噴水、直線運河は捨て去られ、あるいはミニチュアの滝、曲がりくねった小川、人造湖に作りかえられた。コールブルック近くの *Ryskins* のバサースト卿は*、庭園の中に曲がりくねった小川を作った最初の人物であるが、その効果はあまりにも普通ではなかったため、友人のスタフォード卿はそれが意図的に作られたものとは信じられず、経費節約のためかと思い、「小川の流れを真つすぐにしたら本当のところどれくらい余計にかかるのか」と尋ねたくらいだった。

*『ガーデニングの進歩』バリントン著 『考古学』第5巻 *Progress of Gardening, By Barrington*

ちょうどこの頃キャロライン女王 [1683~1737年] が「ハイドパークの一群の池をつなげて現在サーペンタイン川と呼ばれる一つの池を作った」。簡潔さを追及して行われた、これらの改革と呼ばれるものが結果的にはより硬直的、様式ばったものとなってしまった事例が多数見られたが、これはそれらのほんの一例に過ぎなかったのである。中国式ガーデニングがこのデザイン流派に与えた影響を考えれば、これは何ら不思議なことではなかった。この新しい部類の造園家の一人であるサー・ウィリアム・チェインバーズ *Sir William Chambers* [1723~96年] は、若い頃中国に旅行しそこから『東洋のガーデニングに関する論文集』*Dissertations on Oriental Gardening* と題する本で展開することになるアイデアを持ち帰ってきた。彼が設計したキューの**パゴダはこの一時的に流行したよく知られた記念碑である。**中国人作家リエン・チェン *Lien-tschen* は自らの手で中国のガーデニングの基本原則を書き留めている†：－「庭園設計の手法というものは、その地域の自然を模倣す

ることで本物と思わせてしまうような方法で、外観の楽しさ、成長の豊かさ、木陰、寂しさ、そして静けさを組み合わせる工夫の中に宿っている」。イングリッシュガーデンと中国の庭園とが似ているかもしれないと思い起こしながら、オリバー・ゴールドスミス **Oliver Goldsmith** [1728~74年] は「イングランドではガーデニングの手法において中国と同じ完成度には未だ達していないが、最近になって中国の真似をし始めた。今や昔に比べると自然に対し多くの配慮が払われ尊重されるようになってきている：木はあらん限りの勢いで自由に伸びることができる；一小川はもともとの流れから無理やり曲げられることはなく谷間を好きな方に流れることができる：花は型どおりのパルテールの場所や短く刈られ光り輝く野原に自由に咲きいている」と書いた。

†『庭園賛歌』シーヴキング著 17 ページ *Praise of Gardens.* By Siveking

バティ・ラングリーは、何人かの風景式造園家に対して道案内となる基本原則を示した主唱者の一人であった。その主なものは 28 の原則として示され、そのいくつかは次のとおりである：－「建物の堂々たる正面は広々と優雅な芝生に開かれていること、そこには彫像が飾られ、その両端はさえぎるもののない茂みへとつながっていること」「園路で遠くまででは続いて見えないものの終わりは、森であったり林、ゆがんだ形の岩、奇妙な崖、山、古い廃墟、立派な建物などであること」「何もない原っぱやパルテールのいかなる部分も決まりきった常緑とはしないこと」「いかなる芝生やパルテールにボーダーを作ったり渦巻き模様の刈込みをしないこと」「庭園というものはすべからく堂々と、美しく、そして自然であること」「木陰の園路の樹木や茂みはすべからくスイートブライアー、白ジャスミン、スイカズラと一緒に植えられなければならない。そして木の根元には矮性のアラセイトウ **Dwarf stock**、マガリバナ **Candy tuft**、ナデシコの仲間 **Pinks** で小さく輪を作って囲むこと」「今まで自然の丘や谷間がない場合には丘や谷間を人工的に作ること」「園路が交わるころには彫像で飾ること」、そして同様の多くの原則が「細い小川、鳥籠、洞窟、カスケード、岩、廃墟、窪み、運河、養魚池」を正しく作る方法が示されている。彼はまたそれぞれの場所に最もふさわしい彫像はどのようなものであるかの長いリストも示している：－果樹園には果樹の女神ポモナ、静寂の神ハルポクラテスは茂みにとこだである。「彫像を使うことはガーデニングにおいて危険な試みである、成功することは不可能ではないとは言えるが：ウィルトシャー州にあるスタワーヘッド（サー・リチャード・ホアー **Sir Richard Hoare** の庭園）の川の神の位置は何と不思議なほど巧みであろうか！・・・私はハグリーにある彫像を覚えており（*リトルトン卿 **Lord Lyttleton** による設計）、それは茂みの小径越しに見ることを思い描くのだが・・・ただその台座が隠れている方がよいのと思った」とジョージ・メイソンは書いている。これらの彫像、壺、記念碑は、それらを初めて見つけた時に、見る者に特別の印象を伝えるために配置されていた。シェンストーンは一つの壺により醸し出される感覚について語っており、その結論として「荘厳さというものが多分その狙いであり、その周りの状況というものがそれをさらに助けているのだろう」と述べた。「それらは

大きくて素朴なほどより荘厳となる」。木立、湖あるいは手が入っていない場所は「崇高で」、「美しく」、「絵のようで」、「荘厳で」、「堂々としており」、「威厳があり」、「優雅で」なければならなかった。森は「ざっくりと重厚に」植栽が施され、「茂みは美しく」、洞穴すなわち洞窟は「ゾットするような恐怖 **horror** や身がすくむような恐怖 **terror**」を起こさせるものとされた。「遠くの教会の偽物の尖塔とか本物ではない橋、それは水が途切れることを装うために」(*ホーラス・ウォルポール『現代のガーデニングに関する随想』)が「景観を改善する」ために持ち込まれた。これらのデザイナーたちは形だけでなく色彩についても注意を払い、「荘厳な茂み」には暗い色の葉をした木を植えなければならず、そして景観への効果を考えて所々に明るい色のタッチが加えられた。「地味な色合いの物体が思わぬ拍子に太陽の光を浴びて金色に輝く、それはまるで深刻な表情が微笑みで突然明るく変わるように、白く輝く物体は道化師が永遠ににっこりと笑うように」(†サー・ユードール・プライス『絵画的な美しさについて』 Sir Uvedale Price, *On the Picturesque*)と、この話題について権威ある一人の人物が語った。このような野心的なアイデアはこれらの庭園デザイナーたちにインスピレーションを与えた一方、自然の美しさを再現しようと努力するうちに、これ以上想像できないほどの人工的なシステムに陥ってしまったのである。ウィリアム・メイソン William Mason [1724~97年]の詩、「神々しい簡潔さ」を目指す「イングリッシュガーデン」は、これらの「改革者たち」を導く精神が特徴であり、そのことについてサー・ウォルター・スコット Sir Walter Scott [1771~1832年]はそれは「簡潔さではなく簡潔に見えるように苦勞する情熱である」と言った。

多くの場所がケントによるこの新しい計画に基づき設計された。イーシャーの庭園、「そこはケントと自然がペラムの愛を得ようと張り合ったところ」、そしてクレアモントは彼の最高の作品と考えられた；またカールトンハウスはプリンスオブウェールズのために彼が設計したものであった。ウォルポールは「ケントのすべての仕事の中で最も魅力的であり」、最も「優雅で昔風」なのはオックスフォードシャー州のロウシャム Rousham であると考えていた。ケントは馬車製作者の徒弟として働き始めた；友人の助けを借りてイタリアに行き、絵画を勉強した。もっとも、この芸術については一度も良い結果を得ることはなかったが、建築家としては絵画よりはうまくいき、庭園用に寺院や廃墟を設計した。彼の支援者であるバーリントン卿 Lord Burlington [1694~1753年]の助けにより、女王の目に留まり王室御用達の建築家、次いで画家に任命された。彼はそのアイデアの発案者として、また風景式庭園流派の創始者として彼に追随した庭園デザイナー全員から尊敬された。ある時には、自然のままでありたいという気持ちから、「その情景をさらに本当らしく見せるために」ケンジントンガーデンに枯れた木を植えるということまでやってみたことがある。もっともウォルポールは「こんな極端なことをすればすぐに笑われる」と言った。フィリップ・サウスコウト Philip Southcote [1698~1758年]はケントの「理想郷の情景が自分自身の領域をよくしようという気持ちを高めた」と最初に考えた人々の一人であったようで、「(サウスコウトがデザインした)ウーバンファーム Wooburn Farm の優雅さは並外れていたのだ

欠点ですら印象的であった」*。

*ジョージ・メイソン『ガーデニングにおけるデザインに関する随想』 *Essay on Design in Gardening*
チャーティー近くのウーバンファームは 1829 年時点でもはや存在していなかった。-G.W.ジョンソン『イ
ングリッシュガーデニングの歴史』

サリー州のペインズヒル Pain's-hill は、ほぼ時を同じくしてチャールズ・ハミルトン Charles Hamilton [1704~86 年] により始められたが、それは「この流行の完璧な実例」であった（†ウォルポール）。リトルトン卿が設計したハグリーは同じスタイルのもう一つの庭園、あるいは「装飾的な農場」*ferme ornée* であり、「木陰の新しいモデルづくり、そして細い小川からの解放」を称賛する同時代の著作家たちによりしばしば言及がなされた（‡ジョージ・メイソン）。この場所に関して多くの人々から寄せられた溢れんばかりの誉め言葉にもかかわらず、ギルピン Gilpin [1724~1804 年] § による評価は「確かにこれらの広々とした庭園には美しい眺めが多く見られる」が、「とは言え我われは同じような敷地は容易に考え出すことができる・・・もっと全体を高貴なものに創造できるように組み合わせる」というものであった。ウースターシャー州のハグリーはリザーズからほんの近くの距離に位置しており、既に述べたように、このタイプの庭園としては多分一番称賛されたものであった。詩人である所有者が生きている間にこの場所を見たゴールドスミスをはじめとした人々は、シェンストンの死後ほんの数年のうちに、この庭園を損なうような変化や荒廃が進んだことを嘆いた。ライト Wright [1711~86 年] はこの風景式流派のもう一人別のデザイナーであり、ケントの後継者であった。彼は計画を作りデザインのスケッチは描いたが、自分自身では実際の工事の監督はしなかった。

§『絵画的美しさについての 1772 年の考察、特に山と湖について』ウィリアム・ギルピン著 *Observations on Picturesque Beauty made in 1772, Particularly the Mountains and Lakes* By Wm. Gilpin

風景式庭園との関係で最も高くそびえ立つ名前と言えばブラウン Brown [1715~83 年] の名前である。彼はどのような場所であっても、改良することを頼まれたり、新たに設計することを頼まれたりした時の口癖で、ここは「とても素晴らしい潜在的な可能性 capabilities」があると言ったので、「ケイパビリティ・ブラウン」Capability Brown という名前で有名になった。一時期彼は庭園デザイナーの中で一番人気があった。彼は 1715 年ノーサンバランドに生まれ、キッチンガーデンの庭師として、最初はウッドストック近くの小さな所で、次いでストウで仕事を始めた。そしてその地位のまま 1750 年までコバム卿 [1675~1749 年] のところに留まり、庭園のデザインなるものに挑戦するのは、グラフトン公爵 [1735~1811 年] の庭師頭になってウェークフィールドロッジの湖を実現してからであった。この仕事により世間に注目されるようになり、そしてコバム卿の影響力によりハンプトンコート王室庭園師に任命され、「そこに 1796 年にあの名高いブドウを植えたのは彼であった」*。

*ロンドン『ガーデニング全書』 *Encyclopædia of Gardening* ハンプトンコートのプロウの親株はエデン氏により 1758 年、エセックスのヴァレンタインハウスに植えられたブラックハンブルグ Black Hamburg であった。 フィリップス『果樹』 *Pomarium*1820 年

次に彼はブレナムで雇われ、そこで湖を作ったやり方により彼の名声が確立し、そのうちすぐに、敷地を変えたいと思っている人、あるいは新しく庭園を造りたいと思っている人はみんなブラウンに仕事を頼んだ。彼はクルーム、ルートン、トレンタム、ニューナム、バーリー、その他多くの場所を設計し、国内の庭園の半分に何らかの形で手を加えた。彼は売れっ子となり、イングランドで庭園について何か考えている人はほとんど誰でもが彼に相談した。もしブラウンが新しい風景や庭園を造ることだけに専念していたなら、後世の人たちは彼に対する恨みというものをあれ程までには抱くことはできなかったであろう。しかし実際は、彼の成し遂げたデザインを研究する時、偏見なしに彼の仕事を見ることは困難であった。と言うのも彼の創り出した成果が称えられる前に、彼が一掃してしまった美しさを嘆く気持ちで一杯になってしまうからである。

(仮訳)

“Improvement too, the idol of the age	改良もまた、時代のアイドル
Is fed with many a victim. Lo he comes!	多くの犠牲のもとに育てられる。それ、彼が来るぞ！
The omnipotent magician, Brown, appears!	全能の魔術師、ブラウンが現れる！
Down falls the venerable pile, the abode	由緒ある大建築群は引き倒され、それは住まい
Of our forefathers. . . .	ご先祖様の. . . .
He speaks – The lake in front becomes a lawn;	彼は言う一目の前の湖は芝生になる；
Woods vanish, hills subside, and valleys rise.	森は消え、丘は沈み、そして谷は高くなる
And streams, as if created for his use	そして小川は、まるで彼が使うために作られ
Pursue the track of his directing wand.”	彼の杖が示す先へと流れる

COWPER, *The Garden*

クーパー 『庭園』

イングランド各地の古くからの庭園はブラウンによる変革の影響を被る前に消え去っていたが、幸運なことに何年も経たないうちに反動が起き、そうでなければ庭園が一つでも生き残ったかどうか疑わしく思える。ユーヴドール・プライス卿 (*サー・U. プライス『絵画的美しさについて』) は、見事な古い並木道を通して「15 世紀初めに建てられた由緒ある城のような大邸宅」へアプローチする喜びを語っている。「私は大いに傷ついた」と彼は続ける。「その主人から聞いたことには、私はこの並木道とそれが醸し出すロマンチックな雰囲気と別れを告げるであろうと。なぜなら死刑執行令状にサインがされてしまったからと言うのである」。これらの由緒ある並木道の多くが破壊されるということは、現在のような過剰な直線もたらすおぞましが最期を迎えるということである。これらの木の何本かを

助けたとしても、十分な効果があるとは思えない；それらは昔の道がここにあったといつも思い出させ、その場所は消えてしまった並木道の亡霊が彷徨うことになる・・・チェシャーにある紳士の家にはオークの並木道がある。ブラウン氏は徹底的にそれを非難したが、それは今、持ち主が感じた自然な感覚の方が、改良を職業とする人間による狭量で機械的な考え方よりも勝っていた、その高貴な記念碑として立っている」。少数の人々があのパワー全開のブラウンに抵抗するだけの強い心を持っていたことに感謝の気持ちで一杯である。

水の扱いはブラウンの長所と考えられていた。彼が設計した水景の好例がアシュビー城のものである（+ノーザンプトン侯爵所有）。そこは今は「時により改善されている」ものの、ブラウンに対する最も厳しい批判者であっても、それを見て喜ぶこと間違いないものである。しかし、ここにおいてもブラウンの手により、改善とともに破壊が行われており、1699年頃植えられた並木道の1本の一部を構成していた樹木が2列、彼の命令により切り倒された。彼は自分自身が作り出した川や湖にぞっこん惚れ込んでしまった。そんなある仕事を完成した時、テムズ川を凌ぐほどの成功を成し遂げたと思った彼は興奮して叫んだと言われている：－「テムズよ！テムズよ！お前は私を決して許さないであろう！」。



[図 12-1] アシュビー城

ハンプシャー州のハックウッドパーク（*ボルトン卿の居所）で、ブラウンは様々な変更を加え、そのことを数年後にこう語った：－「相当規模にわたる改変」が、特に館の南面に対して実行された。そこはかつては「古いスタイルの、一続きの階段で上ってくるテラスがあって、台座に乗った彫像で飾られ、大きなため池、斜めの墨壁などがある」というような庭園であった；館からの眺めもまた、長くて整形式の並木道に沿った高いイチイの生垣で遮られていた。自然は今その権利を取り戻した；並木道は取り壊され、散策路や草地へと変わり、遠くの景色も見えるようになった。これらの風景式造園家にとっては、並木道やイチイの垣根はそれ自体美しいオブジェとは考えもしなかったようである。それはあたかもノーフォークの娘がスイスに行って、山があって景色が見えない！と不満を言っているのとほとんど同じである。ブラウンが提案したもう一つの見境なく荒し回る計画は幸運にも実行に移されなかった。彼はポウイス城が建っている岩の部分、そこは最初のテラス、すなわち「日時計のテラス」となっている部分の岩を吹き飛ばしそこを平らな芝生にするという提案をした。この変更がもし実行されたならば、素敵な庭園の残りの部分とまったく調和のとれないものとなっていたであろう。この庭園はウィリアムとメアリーの時代に、この屋敷を数年間所有していたオランダ人のロッシュホフォルト卿により造られたものであった。彼がバーリーで行った改変というものも彼の典型的な手法であった。彼は壁と生垣を取り払い、館の脇の斜面に作られた階段状のキッチンガーデンを一掃し、そしてその場所に木を植えた；彼自身が創り出したこの木立の丘の向こう側、昔の整形式庭園があった場所の正面に、彼は湖を作った。「この由緒ある建物の周辺のおしゃれな配置、その土地にブラウン氏が手をつけたのだが、それがどれほどその様式と昔からの付属物と調和していたか、私があえて言うことはしない」とギルピンが書いたのは、ブラウンの仕事が完成した数年後であった。「疑問に思うのは」と彼は続けて「並木道やパルテールの昔の装飾は飾りのスタイルとして最もふさわしいものではなかったのか。しかしながら、これはなかなか良い疑問であり、どちらの側からも成立しうる議論を数多く呼び起こすものであったであろう」。



〔図 12-2〕 バーリー ブラウンのデザインによる寺院

ギルピンはロッシュ大修道院を訪問した際、そこでブラウンが実施した改変のご都合主義的な手法についても疑問を呈している。言われているところによると、ブラウン自身は線を引くことはできなかつたし、芸術的な訓練や歴史的な関心、あるいは彼が改良しようとしている情景の自然美を理解するに足るだけの教育も一切受けていなかった。したがって、よりふさわしい風景を創り出す努力の過程で、彼が何回も見事に失敗したことは驚くに当たらない。「多くの現代の場所について」「彼は装飾を加え美化した。しかし、廃墟は新しいアイデアを提案したが、これについて彼は十分に考慮したのか疑問に思う。ブラウンはロートン尖塔を臨む溪谷の一つを仕上げた：それを湖とともに浮かべ、大変美しい情景へと作り上げた。しかしながら、それは大修道院の廃墟と調和する付属物としてはあまりにも荘厳であり、またあまりにも人工的であると危惧した」とギルピンは書いた*。

*ギルピン『絵画的美しさについての考察、1776年、特にスコットランドのハイランドについて』*Obs. on Picturesque Beauty, 1776, Particularly the Highlands of Scotland.*

彼は昔の大修道院の周りの土地をみんな平らにしたが、「小綺麗なボウリング用グリーン」の中に建っている壁と柱は残しておいて、また大きすぎる廃墟のかけらやマウンドは残らず取り除き、これらは建物の昔の壁面線を示していたものであり、そして川にダムを作り、滝の効果を出すために大修道院から石を取ってくることでやった。ギルピンは最大の皮

肉を込めて「もしブラウン氏がさらに一步踏み込んで、廢墟を引き倒し、そして優雅な大邸宅を建てることになったら、すべてが正しいということになるであろう」と述べた。廢墟に関しブラウンの細工のいくつかは、最近になって取り除かれ、可能な限り昔の状態に復元された。

以下はブラウンとスカーブロー卿 Lord Scarbrough [1725~82年]との間で、これらの改変に当たっての合意事項である（†スカーブロー伯爵のご厚意に基づく許可により、サンドベックの写本原本からコピーしたもの）：－

スカーブロー卿と「ケイパビリティ・ブラウン」との間の合意 1774年：－

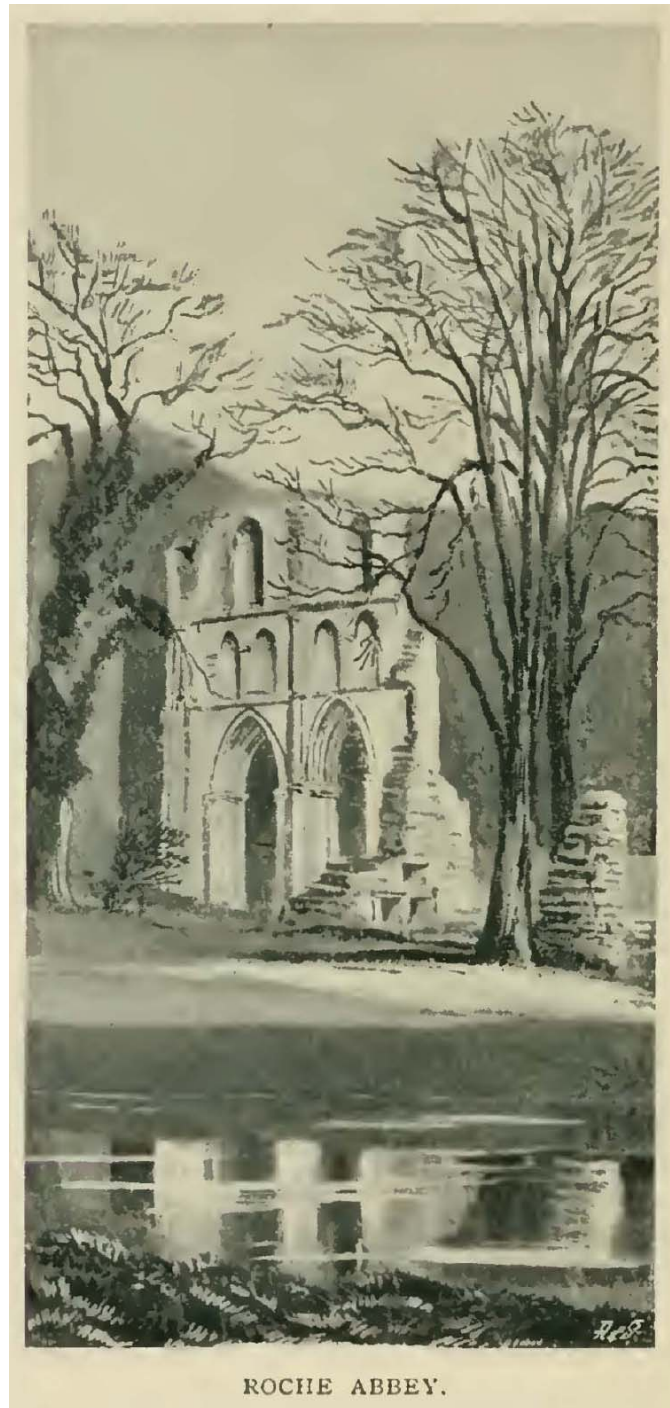
1774年9月12日

上記日付にてスカーブロー伯爵を一方の当事者とし、ランスロット・ブラウンをもう片方の当事者として、ヨーク地方サンドベックにおいて実行されるべき仕事に関する条項について同意され、結ばれた合意事項（すなわち）：

第1条 狩猟地と農場を分離する隠れ垣根を完成すること、およびその中に壁を建設すること、隠れ垣根の下部を乾燥状態に置くため適切な排水をあわせて作ること

第2条 芝生地にあるすべての古い池を潰すこと、および地面を平らにしてすべての土地の排水をすること

第3条 上記隠れ垣根と第2条に書かれた古い運河の間のすべての土地の排水と地面を平らにすること。本条に書かれている空間における装飾のために必要と考えられる木はいかなるものであっても植えること、そして排水、地面を平らにしまたは隠れ垣根を作ることにより芝生が消失しまたは傷んだところはいかなる場所であっても草の種およびシロツメクサ Dutch Clover を敷地全体に蒔くこと



[図 12-3] ロッシュ 大修道院

第 4 条 馬小屋の使用のための良好な池を作り維持すること

第 5 条 ロッシュ大修道院のすべての溪谷のあらゆる部分を完成すること、スカーブロー卿とともに（詩人の感覚と画家の目でもって）決定したアイデアに従って、ハンマー池の端に始まりロウトンに向かう溪谷に沿って下り：朝のロウトン、スカーブロー卿の土地

が続く限り、川を延長し溪谷を整えること、それは現在の農家の横を通り、新しい農場の境界として定めた分岐点に至るところまでとする。注意点：森の中の散歩道はこの記載に含まれ、建物以外のすべての事柄も同様である。当事者ランスロット・ブラウンは彼自身、彼の相続人、執行人および管理人が彼あるいは彼らの能力の最善の限りを尽くして、本日から 1777 年 12 月までの間、上記 5 条に書かれていることを実行することあるいは実行されるようにすることを固く約束する。上記 5 条に書かれていることが適切に実行された場合、スカーブロー伯爵は彼自身、彼の相続人、管理人および執行人が同意された支払い時期に 2700 ポンドをイングランドの適法通貨にて支払うことあるいは支払われるようにすること、およびこの合意に先立ってサンドベックの貴族のためにブラウンが作った計画および手間を勘案しおよびその対価として 300 ポンドを支払うことあるいは支払われるようにすることを固く約束する。スカーブロー卿は粗びき木材 **Rough Timber**、4 頭の使える馬、荷車、そのための馬具、手押し車および厚板を、樹木および低木とあわせて調達すること。

支払い時期は

1775 年 6 月	800 ポンド
1776 年 2 月	400
同 6 月	400
1777 年 2 月	600
仕事の完成時に	800

3000 ポンド

(署名) スカーブロー
ランスロット・ブラウン

注意深くデザインされよく管理されてきた昔の庭園に代えて、ブラウンは硬直的で本物らしくない「自然風景」に置き換えたが、それに取り囲まれた堂々とした館のいくつかは物憂い眺めを醸し出した。そのことはナイト **Knight** [1751~1824 年] により次のように描かれている*：-

*「風景」*The Landscape*、第 3 巻中の教訓的な詩、ユーヴドール・プライス宛て **R. P. Knight** 作 第 2 版 1795 年

「しばしば独りぼつんと邸宅らしきものが建っているのを見た時
改良者のみじめな手から離れたばかりで
刈り込まれた芝生の真ん中に、それは遠くその周囲に這い回る
一つの永遠の起伏に富んだ土地の広がりの中で；
そして点在する低木の茂み、それはお互いにならずきながら

それぞれがぎこちなく自分の正式な兄弟に手を振っている：
大きく広がる情景に飽きて、こんなにも退屈でからっぽで
神に対し心から私は祈りを捧げた；
再び苔むしたテラスを高くし、
そして迷宮の悩ましい迷路を押し広げる；

どんな形にもできるイチイを同じ高さに元に戻し
そして昔の並木道をもう一度植える。
いくつかの特徴はそれから、少なくとも、我われは手に入れるべき
この平坦で面白味のない波打つ野原に印をつけるために：
いろいろな色合いや形がいくつか入って来るであろう
この画一的で、永遠の緑を切り開くために」

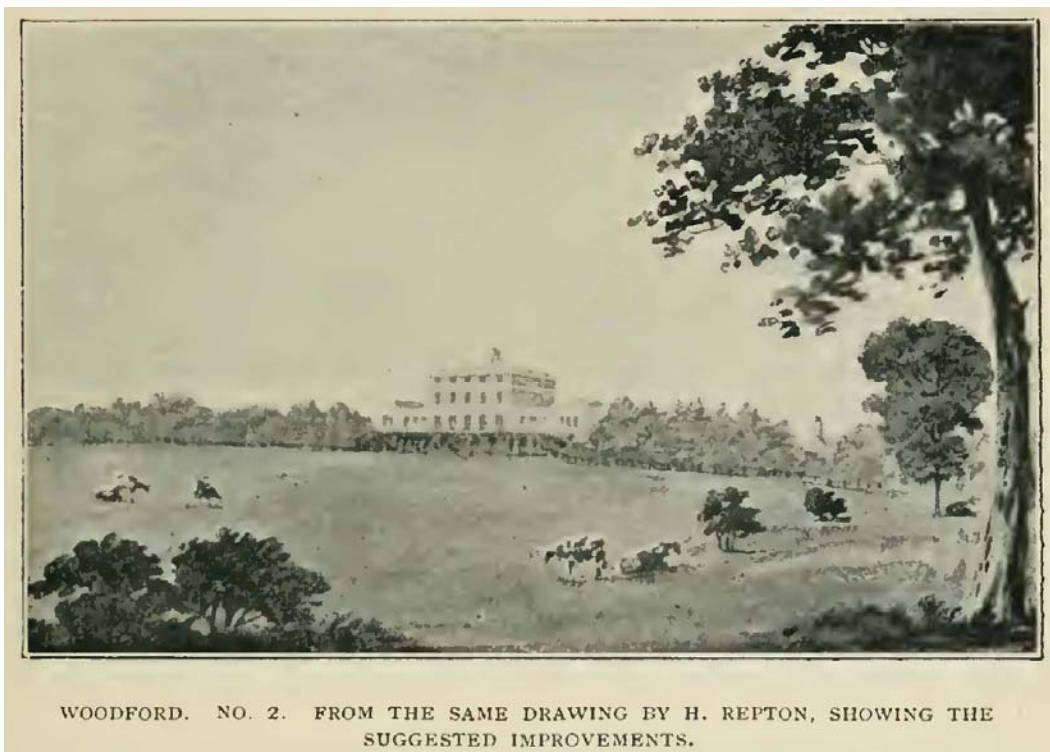
ブラウンはギルピン、プライス、ナイト、メイソンによって激しく批判されたが、信奉者や模倣する者もたくさんいた。その中で一番よく知られているのはレプトン Repton [1752~1818年] である。彼はブラウンの仕事の崇拜者であり、同じスタイルでデザインの仕事に取り組んだ。しかしながら人々は今やブラウンの失敗というものに気がつき、また昔の場所や歴史的な遺跡を彼が破壊したことを反省し始めていたので、レプトンはブラウンがやったような全部一変させてしまうような改変をあえて提案することはほとんどできなかった。レプトンはブラウンに批判的なことを書く人々とは表では対峙したが、批判者の考え方は明らかに彼の判断に影響を与えた。彼は何か付け加える前に、ある場所で見つけたものすべてを常には変えようとはしなかった；また何から何まで「風景式」にこだわることはしなかった。彼は次のような考えを持ち続けた「フラワーガーデンはその場所の全体的な情景から切り離された別個の対象であるべきである；それが大きかろうと小さかろうと、多様性のあるものか整形式であるかにかかわらず、野ウサギや小動物たちから内側のフェンスで保護されるべきである；この囲われた中では、あらゆる姿の珍しい植物の栽培が奨励されるべきであり、適切な土壌の手当てや、植物の分類ごとに求められる日照条件等 aspect についても同様である。アメリカの植物には湿地花壇が用意されなければならない：水生植物の中にはとてもきれいなものもあるが、水面あるいは水際で栽培しなければならない。数多くの種類の岩生植物にはごつごつした石の花壇を用意しなければならないが、土から自然にできた石のように見せかけたものはいけぬ；ただし、特に、匍匐性植物の仲間、そのように仕向けて技術的に支えてやれば、自分たちで自然に優雅な花綱飾りを作るので、そのための棒とか輪がなければならない」(*レプトン『風景式庭園に関する観察』1803年 *Obs. on Landscape Gardening*)。これはフラワーガーデンに関するレプトンの考え方であるが、これはデザインのほんの小さな一部分に過ぎず、そしてそれが存在すること自体で彼は弁明をしなければならなかったようである。彼は、花のための小さな整形式庭

園を時々デザインしたとは言え、「無用の長物と化した庭園を鹿や羊のために、それらが本来あるべき姿に何エーカーも修復した」と自慢している。ヘーウェルグレンジ **Hewell Grange** にある「オランダ庭園」は彼の提案に基づき造られた（†写本レプトンの「レッドブック」ウィンザー卿所有）。この庭園は半円状で、刈り込まれたシュージャ **Thuja** [ヒノキ科クロベ属 ニオイヒバやコノテガシワ等] の生垣で囲まれており、直線部分は高い煉瓦の壁となっている。内側の花壇はツゲで縁取られ、花壇の間には細い砂利道があり真ん中はタイル敷きとなっていて、庭園の真ん中には日時計がある。あわせて彼は芝生と岩庭のデザインを行い、昔からあるフランス庭園はイチイの刈込み生垣で近づいて行けるが、そこには彼は手を付けなかった。「まったくもって自然の情景と調和が取れていない」（‡写本レプトンの「レッドブック」1793年、ノーサンプトンシャー州ファインドン、マックワース・ドルベン夫人所有）として並木道のことを嫌ったが、時には「大昔の威厳の思い出の類」を大事にした。ファインドンでは牧師の家と教会により景観が「阻害」されており、庭園の壁、麦芽製造所、鳩小屋、さらには村の一部は「取り除かれるべき」と言ったものの、「聖なる道」 **Holly Walk** と呼ばれる並木道は残した。

ある場所をどう改善したらよいか助言を求められた時、レプトンは「レッドブック」Red Book と彼自身が呼ぶ本を用意しており、そこには、現在の庭園の計画と眺め、それとそれに対する提案が描かれていた。彼はこれらの「レッドブック」を集めたものを拡張し、彼自身の風景式庭園に関する見解の説明を加えて出版した。これらの見解がいかなるものであったかを理解する一番の早道は、これらの「レッドブック」を研究することであり、その多くが今でもなお出版されていない。以上の説明は、エセックスのウッドフォードの彼の写本「レッドブック」から引用したものである（§コートネー・ワーナー氏所有の写本の原本より複製）。この本の最初のスケッチは当時の館を、地面から眺めたものを表しており、キッチンガーデンが片方に広がり、もう一方には村がむき出しのまま見える。前者は取り除かれなければならない、後者は木を植えて隠す、という当たり前の改善なので私自身が提案する価値があるというほどのものではない」。2つ目の眺望はこれらのデザインが実現されたならこの場所はこうなるであろうというものである。その他の改変というものは主に館からの眺めをもっと楽しいものにするを目的としており、耕作地に木を植えたり芝を張ったり、「芝生の下の方を水面に浮かべる」という改変であった。



[図 12-4] ウッドフォード NO.1 H. レプトンの図から



[図 12-5] ウッドフォード NO.2 H. レプトンの同じ図から
改善の提案を示している

レプトンはブラウンを称賛、激賞するこの流派の最後の人物だった訳ではなく、ほかにも情熱的な言葉で語る人たちはまだいた：－

「自然を称えるために生まれ、自然の仕事は完成する
美しく、崇高で偉大なすべてをもってして
ミューズの女神が一人一人彼のために月桂樹の冠を花輪で包む
そして不滅のブラウンの名声に捧げる」*

*「植栽に関する現在の嗜好の起源と進展」チャールズ・アーウィン子爵卿への書簡－1767年 ギルドホール所蔵写本 “The Rise and Progress of the Present Taste of Planting”

1835年になってもまだデニス Dennis [1776?~1846年] は彼のことを偉大な「イングランドの嗜好の改良者」と言っている（†『風景式造園家』J. デニス著 1835年 *The Landscape Gardener*）。本書の著者もブラウン自身が誇りに思っていたかもしれないいくつかの変化に対して称賛するところの者である、もし彼の功績が彼が一掃した物量によって評価されるとするならばであるが。セントジェームズパークの改変について「最もうまく並木道を除去した」とブラウンは言ったが、「除去は達成された・・・ものの、その結果、見事なニレの木が途方もないほど破壊されたのであった。確かに、オランダ運河をきれいな流れの川に作り変え、土手は内側に曲げられ、その終点の一方は植栽が施された島で、もう一方は半島とした驚くべき創意に対し、これらの改良を企画した者に対してはかなりの功績が認められる」。これはエイトンにより「計画され実行された」。バッキンガム宮殿の敷地は大体この頃、ケンジントンとキューの王室庭園師で、『キューの植物』*Hortus Kewensis*の著者の息子であるウィリアム・エイトン William Aiton により設計された。デイヴィスはこの流派のもう一人の造園家であり、同時代の人からは、ロングリートで彼が担当した改変は特に、「相当な趣味を披露」したと言われた。ノーフォードの2つの眺め（284ページ）[本仮訳 図12-7]は整形形式から風景式庭園への変化がどれほど徹底しうるかを示している。このカスケードの池は1716年から1724年の間にエドモンド・プリドーが、彼はコーンウォールのプリドー出身でノーフォークに旅行で来ていて、その時スケッチしたものである。2枚目の眺めは1894年に、なるべく同じ地点に近いところからの眺めとなるように撮影された写真から持ってきたものである。70エーカーの広さの湖は1842年頃に作られ、硬直的な池の痕跡はすべて消え失せてしまっている。初期の風景式の可愛らしい事例としてはロンドンの近くのガナズベリー Gunnersbury に見つけることができる*。



[図 12-6] ガナズベリーパーク 庭園の寺院

*レオポルド・ロスチャイルド氏の所有であり、現在では大変完璧に行われているガラスのもとでの果樹栽培で特に有名である。

元の館はイニゴ・ジョーンズあるいはその弟子のウェブ Webbe [1611~72年]により 1663年にサー・ジョン・メイナード Sir John Maynard [1604~90年] のために建てられたが、今はなくなってしまった。庭園は主にケントにより 1750年頃設計され、その後、1761年にこの場所を買って大金を庭園に投じたアメリア王女 Princess Amelia [1783~1810年]により手が入れられた。彼女によって建てられた壁、寺院のいくつか、水浴びのサマーハウス、そして模造のゴシック廃墟は今もなお残っており、多くの見事な材木用樹木、特にシーダーも残っている。

18世紀末までには風景式庭園はイングランドの国民スタイルと認識され、フランス、イタリア、ドイツの大陸諸国でも真似された。「イングリッシュガーデン」は流行となり、海外においても英国趣味を称賛し、他の国でも真似するよう勧める本が書かれ*、そして昔からの庭園は取り壊され、新しいスタイルに取って代わられた。しかしながら、大陸においては一点欠けている点があった。それは、これらすべての風景において欠点を補うもの、

すなわち緑の芝生であった。イングランド以外のどの国にも草地がこれほど美しく緑色のところはなく、風景式造園家たちはこの偉大な長所に対し感謝した。

*『英国式庭園の手法』*Del'Arte dei Giardini Inglesi*, ミラノ 1801年 『英国趣味の庭園の計画』*Plan de Jardins dans le gout Anglais* ジャン・ルイ・マンサ コペンハーゲン 1798年 Ob. Folio, &c.

この流派の書き手たちが、この英国趣味を最初に作った人としてミルトンとベーコンを取り上げるのは変である。彼らに言わせると、ベーコンはその理想とする庭園の一部を「自然な野生状態」に捧げており、また「きれいに刈り込まれた緑の草地」を称賛しているからであり、またミルトンは天国ではこのようだと書いているからだ：－

“Flowers worthy of Paradise, which not nice art 楽園にふさわしい花々を、それは立派な技術によって
In beds and curious knots, but nature boon 花壇や奇妙な結び目で育てたのではなく、豊かな自然が
Poured forth profuse on hill, and dale, and plain.” † 丘や谷や野原にととうと注ぎ込んだもの

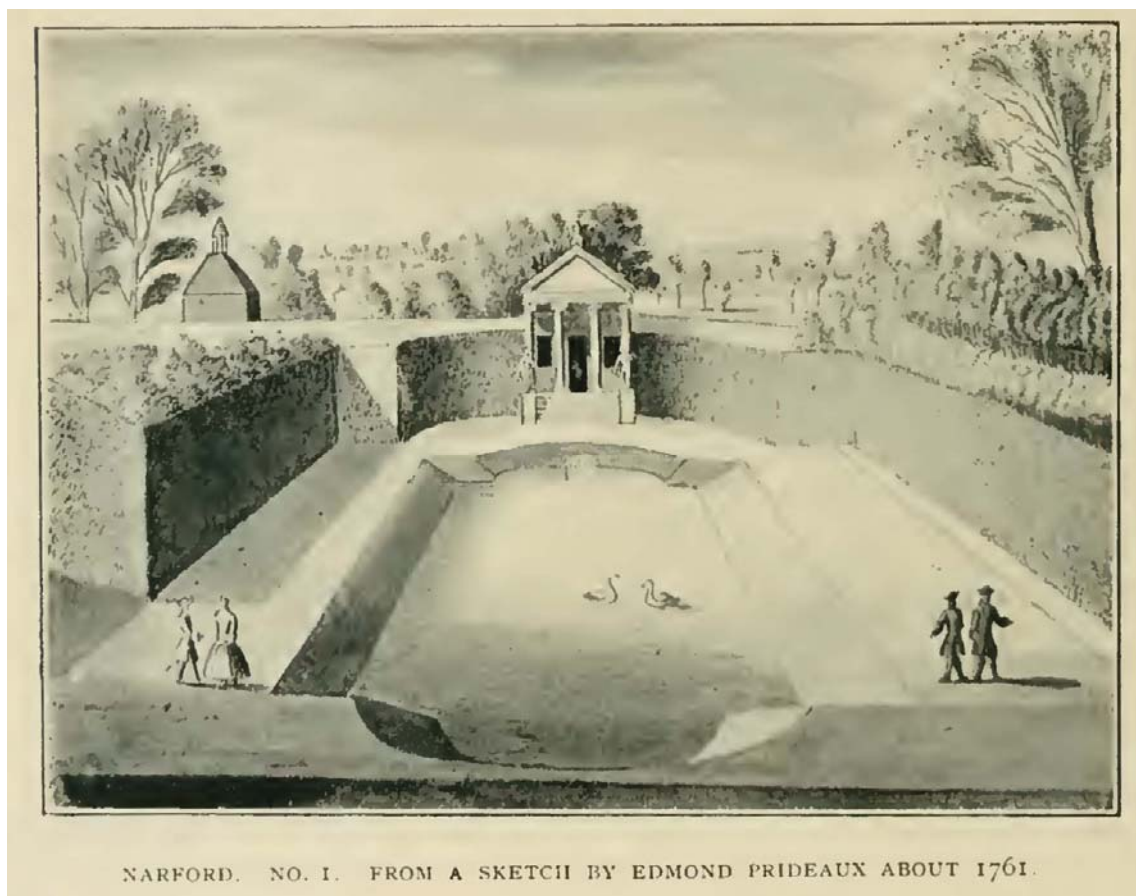
† *Paradise Lost* – Book IV

† 『失樂園』第4巻

にもかかわらず、これらの二人の人物がどれほど風景式造園家の全体的な発想に反していたことであろうか。ベーコンは緑の草地を愛していたとは言え、彼は自分の庭が1年を通して毎月花がいっぱい咲いていることを望み、「調和しない性格により連続した芝生の品位を下げる・・・庭園」というような考えや、あるいは「フラワーガーデンは館の窓からは決して見えてはならない」と言われればショックを受けたことであろう。サー・ウォルター・スコットは、風景式庭園に関する素敵な文章の中で、ミルトンは新しく創造された楽園における自然の美しさを描き出したものの、彼の時代の「端正な庭園」を非難する意図はまったくなかったと指摘している（‡『四季報』*Quarterly* 第37巻 1828年および『批評』*Criticism* 第5巻）。スコットはあれほどまでに多数の昔の庭園を破壊してしまった大きな間違いというものをよく理解していた。彼はエリザベス朝の庭園が館とどれほど完璧に調和していたかを見ており、「怪物の形にイチイを剪定したオランダ人のつまらない模倣」について立証することはできなかった一方で、彼は「ロンドンとワイズほか、オランダ風に土地を設計した人々の仕事、これらは完全に破壊するよりは修正を加えた方がよほどましな対象である」という庭園が存在していたことは認めていた。彼は見事なテラス、一続きの階段、手すり、イタリア風の庭園の壺、フランスの噴水や水の仕掛けを称えた。

サー・ユーヴェル・プライスは合理的な風景式庭園のチャンピオンであったが、「噴水」*jet d'eau* しか良いとは認めなかった。その理由は、噴水は間欠泉の形で見られるようなものであったからだ。サー・ウォルター・スコットはもっと広い心の持ち主だったので、「水を空中に吹き飛ばし、霧のシャワーとして降り注ぐ荘厳な噴水の」美しさを捕えることは、それ自体で十分に意味があると確信していた。これらの人々が、整形式庭園にもそれなり
の美しさがあり、その様式のすべてを容赦なく破壊することの大いなる愚かさを指摘した

ので、破壊の進行は徐々に食い止められた。



[図 12-7] ナーフォード NO.1 エドモンド・プリドーのスケッチより
1761年頃

好みは変化し、その後の改良のための試みにあたっては、それまでのような悲惨な結果はもたらされなかった。間違いが犯されつつあった時最初にそれに気づき、その流行がそれ以上広がることを止めようとした勇気ある人々に感謝しなければならない。「自然流派」に反対のアピールを最初にした何人かが書いたものは、ほんの数年前に整形式の乱用者が用いた言葉と同じくらい強い言葉で語られていた。



[図 12-8] ナーフォード NO.2 1894 年

レプトンと対立したナイトが書いた以下の数行はその良い例である：－

「だから、だから！あの狂暴な悪魔はどのように呼ばれようと
 からっぽではげた瘦せて貧弱な天才
 汝のシャベルとツルハシはここにごろんところがり
 そして汝の好きなブラウンの墓へと向かっている：
 汝の好きなブラウン、その革新的な腕前、
 手始めにこの豊かな土地への汝の呪いとつきあう」*

* 『風景』 *Landscape*, R.P.ナイト 1795 年

風景式で小さな邸宅の庭園、それはミニチュアの芝生、「低木の茂み、樹木の細長い列」が備わったものを造ろうとする非合理性はラウドン Loudon [1783～1843 年] により指摘された*。その代わりに彼はより整形形式のデザインを推奨し、「幾何学的スタイルで」設計された 6 エーカーの敷地の邸宅の計画およびそれと最近の流行を組合わせたものを提案している。リージェントパークはこの世紀の初期に造られ、ラウドンは彼の理論を説明するため

にそれについて語っている。「官有地監督官、故フォーダイス氏の壮麗なデザインは、今（1812年）メリルボンファームで実施中であり、数年のうちには植栽に関する過去と現在のスタイルの調和の貴重な実例を提供することになるだろう」。

*『庭園および愉しみの土地を造るためのヒント』J.C.ラウドン著 1812年 *Hints on the Formation of Gardens and Pleasure Grounds*

フラワーガーデンが再び今まで以上に注目される地位を獲得し始め、そこは向こうの狩猟地とは明らかに別のものとして再び管理される一方で、低木の植え込み *shrubbery* とは別のもの、あるいはより自由な場所と考えられた。フラワーガーデンの外側の土地の植栽も大いに改善された；堅苦しい低木の茂みと樹帯は分解され、そして木々はより装飾的に配置された。アラントン Allanton のサー・ヘンリー・スチュアート Sir Henry Stuart [1759～1836年] の本『植物栽培者ガイド』*The Planter's Guide* は、既に言及したところの『四季報』の中でサー・ウォルター・スコットが書評を書くこととなったが、サー・ヘンリーは植栽の分野ではかなりの権威者で、彼自身の栽培場により、また彼の著作を通じて樹木の管理および状況に応じた適切な樹木の選び方について有益なヒントを提供した。このようにして庭園とその周辺は再び技術と好みをより反映した形で取り扱われるようになった。その他のスタイルについても現在では同様に使われているが、風景式は、その特徴を改善した上で今もおファンがいて、また高い技術のデザイナーも有している†。建築家たちは庭園のデザインをむしろ研究のために行い、そして芸術家、造園家は、多くの実例に見られるように、風景式というものは、注意深く扱えば、この国と気候によく適した形で、館および創り出された情景が持つ最も心地よい効果と調和させることは可能であることを示した。

†『風景式庭園の技術と実技』ヘンリー・アーネスト・ミルナー著 1890年 *The Art and Practice of Landscape Gardening* By Henry Ernest Milner